

京都府立盲学校資料室所蔵の『杉山真伝流』関連写本類について

大浦 宏勝, 市川 友理

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部

【緒言】『杉山真伝流』とは、江戸元禄期に隆盛を極めた、日本鍼灸を代表する杉山流という流派の流儀書である。既に杉山検校遺徳顕彰会蔵本と故小椋道益蔵本を中心に、その他全国図書館に散在する「真伝流」の名を冠した書群を系統立てて研究整理し、『日本医史学雑誌』に発表してきた。しかし、「目録巻」に存在する「秘密五巻之内」とされる、杉山和一が古流派から受けついで内容と思われる手技群に関しては、該当書が無く内容不明のままだった。今回これらの手掛かりとなる明治期の一連の筆写本が発見されたので、その意義を発表する。

【方法および調査結果】京都府立盲学校資料室には、江戸期の盲人互助組織であった当道座関連の書籍や明治期の盲人教育関連の書籍類とともに、杉山流を主とした江戸期日本の鍼灸按摩関連文献もいくつか存在する。今回、「杉山流」「真伝流」の名を表題した書籍類を調査したところ、表題内容以外に多くの貴重な筆写本が合本されていた。以下、「目録巻」の項目に従い系統立てて整理する。

(1)「真伝流表之巻一〜五」——「五綱論」を含んだ、和田正長再編集以前の内容構成である「表之巻一〜五」。(2)「真伝流手指法十八術」——顕彰会蔵本「表之巻第五」の十八術の手術内容のみを記載したもので、主治・口伝は含まれていない。(3)「真伝流中之巻五之中」——「鍼刺心要」に始まり、顕彰会蔵本では「中之巻第一」の後に挿入された「中之巻(続)」に相当する部分。(4)「真伝流中之巻主治別伝」および「真伝流中之巻第一」——三島安一総検校撰で、顕彰会蔵本の「中之巻第二」に相当。(5)「真伝流中之巻七十一術手術」——島浦和田一総検校撰で、顕彰会蔵本の「中之巻第一」に相当。(6)「七十一術主治」——上記の手術に対応する主治を簡略化して記したもので、上記の手術とこの主治を合わせた内容が、杉浦氏所蔵の「中之巻」と一致する。(7)「真伝流地之巻 一百箇条」——新たに発見された内容で、主に妙鍼流の『鍼灸五蘊鈔』を参考とし諸病の治法を述べたもの。(8)「真伝流竜虎之巻」——奇穴集で、顕彰会蔵本の「竜虎之巻」と同内容。明治期に吉見英受の筆写したものと思われる。(9)「真伝流秘密之巻」——杉山和一総検校撰で、顕彰会蔵本の「別伝三関之法」に相当。巻末に「明治卅六年九月写之 吉見英受所蔵」とある。(10)「真伝流竜虎之巻・奥之巻」——「目録巻」記載の「秘密五巻之内」の内容に相当するもので、今回の大発見であった。「本義十五勢」「徳明野回之鍼」「神道三神之鍼」「万病一本之鍼」「水魂不将掛」「水口代生掛」「風体三妙掛」「函檀掛」「村雲掛」など、意味不明の手技内容が解明された。(11)「真伝流手技学」——吉見英受の婿である吉見輝雄氏所蔵本を門人の高橋啓次郎が筆写したもので、巻頭に「杉山流鍼法手術及主治口伝」とある。明治初期に流布された真伝流手技術で、後に「杉山真伝流百法鍼術」と呼ばれるようになった内容。元禄期の内容とは異なる点が多く、時代を経るに従い何人かの伝授者を介して名称の変更や内容の複雑化が見られる。(12)「杉山流鍼法手術及主治口伝」——上記本とほぼ同内容で、異なる点は島浦検校の文章である「中之巻序」「中之巻巻首」「中之巻末」を最後に載せていること。「杉山流」と冠していることから、真伝流家元である和田家門外不出の書とされた『杉山真伝流』の各手術が流出し、後世において杉山流諸家の改良が加えられたものと推測する。

【まとめ】以上の資料群は、江戸中期における杉山流と『杉山真伝流』の成立、その明治に至る変遷の過程、および杉山流に先立つ古流派からの伝授内容を知る上で、貴重なものといえる。